

ラフカディオ・ハーン旧蔵書『ギリシア詞華集』  
仏訳版の書き込みについて  
—昆虫譚と幽霊妻をめぐって—

中 島 淑 恵

富山大学人文学部紀要第 66 号抜刷

2017年2月

# ラフカディオ・ハーン旧蔵書『ギリシア詞華集』 仏訳版の書き込みについて

—昆虫譚と幽霊妻をめぐる—

中 島 淑 恵

## はじめに

富山大学附属図書館所蔵のラフカディオ・ハーン（小泉八雲）旧蔵書（ヘルン文庫）には、2種類の『ギリシア詞華集』が収蔵されている。そのうち1種類は英語版で、書架番号 [302] *The Greek anthology : as selected for the use of Westminster, Eton and other Public schools / literally translated into English prose, chiefly by George Burges, to which are added Metrical Versions by Bland, Merivale, and others, and an index of reference to the originals, London, G. Bell, 1893.* であり、もう1種類はフランス語版で2巻本の、書架番号 [1641] と [1642] *Anthologie Grecque, Tome I-II, traduite sur le texte publié d'après le manuscrit palatin par Fr. Jacobs, avec des notices biographiques et littéraires sur les poètes de l'anthologie, Paris, Hachette, 1863.* であり、いずれもハーンが来日後に購入したものと思われる<sup>1)</sup>。いずれの『ギリシア詞華集』にもハーンによる鉛筆の書き込みが随所に見られるが、本稿はそのうちフランス語訳の2巻本について調査を行った結果を記すものである。

## 1. 裏表紙および見返しの書き込み

ヘルン文庫所蔵の仏訳版『ギリシア詞華集』第1巻の裏表紙には、鉛筆書きで数字の書き込みがある。左上部に18と37の数字、その下に不鮮明ながら、150-155の数字。以下裏表紙を印刷の余白に、p. 144, 281-284-305-365 および (p. 180), p. 214, 217 という鉛筆の書き込み、さらに右下部に不鮮明ながら272という書き込みが見られる。ところどころにp. というアルファベットが挿入されていることから分かるように、これらは基本的にその書物の頁数を表し、その頁には何らかの書き込みがあるのが通例である<sup>2)</sup>。

また、裏表紙の見返しには、やはり鉛筆書きで、以下のような記述がみられる。

272 Ménandre
♪ Érinne
279 (ヒョウタンの絵)
285 insect
297 votive off
314 Vengeresse ghosts
317 Aunts
319 <sup>3)</sup> Skull
320 Euripides to see
338 Strange bread

これらの記述についても、左の数字はページ数を示し、右の記述は、該当するページに収録されている詩の中でハーンが気になった事柄を記したものではないかと思われる。以下、これらの数字を手掛かりとして、同書本文を精査してみた。なお、裏表紙や見返しに書き込みがなくても本文に鉛筆で印がつけられているものもあり、それについてはその旨を記し以下に取り上げてある。

なお、目次 (Table des Matières) によれば、同書の構成は以下のようにになっている。

Description des statues du gymnase public le Zeuxippé	1
Les inscriptions de Cyzique	11
Les préfaces des anthologies	16
Epigrammes érotiques	18
Epigrammes votives	69
Epigrammes funéraires	126
Epigrammes descriptives	243
Epigrammes exhortatives et morales	372
Epigrammes de table et comiques	392

このうちハーンの鉛筆書きによる書き込み (マーク)<sup>4)</sup> があるのは、18 頁, 37 頁, 144 頁, 154 頁～157 頁, 168 頁, 172 頁, 180 頁, 184 頁, 214 頁, 245 頁, 246 頁, 258 頁, 272 頁, 279 頁, 285 頁, 297 頁, 314 頁, 317・318 頁, 320 頁, 338 頁である。すなわち、艶笑詩 (Epigrammes érotiques) の項目に 2 か所ある他は、碑銘詩 (Epigrammes funéraires) と描写的エピグラム (Epigrammes descriptives) に分類されるものに二分されていることになる。

本稿では、中でも数多くの余白への書き込みがある「碑銘詩」に分類される詩の中から<sup>5)</sup>、ハーンに特徴的であると思われるものを取りあえてその様相を観察してみることにしたい。

## 2. 虫の死を悼む碑銘詩

154 頁から 157 頁には、おびただしい数の余白への書き込みがある。ただしなかには書き込みのないものもあるので、どのようなものに書き込みがあり、どのようなものに書き込みがないのか、以下にその点についても観察しておきたい。まず、189 番の詩と 190 番の詩には連続して書き込みがある。

189. Aristodicus de Rhodos. — Sauterelle, le soleil ne te verra plus chanter harmonieusement dans la riche maison d'Alcis ; car tu t'es envolée vers les prairies de Chymènes, et vers les frais parterres de la belle Proserpine.

ロードスのアリストディクス — キリギリス<sup>6)</sup>よ、太陽はもはやお前は旋律豊かに、アルキスの豪邸で歌うのを見ることはないだろう。というのも、お前はクリュメヌの野に、美しきプロセルピナのみずみずしい花壇へと向けて飛び去ってしまったのだから<sup>7)</sup>。

190. Anyté ou Léonidas — Myro a construit pour une sauterelle, rossignol des guérets, et pour une cigale prise, sur un chêne, ce tombeau qu'elle a baignée de ses larmes ; la jeune fille est bien désolée, car l'implacable Pluton lui a ravi les deux objets de sa tendresse.

アニユテあるいはレオニダス — ミロは一匹のキリギリス、茂みの鶯のために、そして檜の木の上でとらえられた蟬のために、この墓を作り、それを涙で浸した。若い娘は実に嘆き悲しんだ。というのも、呵責なきプルトンが、彼女からその愛玩する二つの対象を奪ってしまったからである。

次の 191 番の詩には余白の書き込みがないが、これは死んだ「カササギ」を 1 人称として歌う墓碑銘である。

以下、192 番から 198 番までは連続して余白に書き込みがある。

192. Mnasalque. — Tu ne chanteras plus entre les sillons, gentille cigale, et moi, les yeux à demi fermés sous l'ombre de ce chêne, je n'entendrais plus le ramage de tes ailes sonores.

192. ムナサルカス — お前はもはや畔の間で泣くことはない、優しき蟬よ、そして私は、檜の木のもとで目を半ば閉じて、お前の響き高い羽音を聞くこともないのだろう。

193. Simmcas. — En passant dans une chânaie touffue, j'ai pris avec la main cette sauterelle, tremblante de peur, sous les feuilles de la vigne consacrée à Bacchus, afin qu'enfermée dans une maisonnette bien close, elle me réjouisse par son chant agréable, bien que sa bouche soit muette.

193. シミアス — よく茂ったオークの木の中を通過して、バッカスにささげられた葡萄の葉の下で震えていたキリギリスを、私の手中に捕まえた。しっかり戸締りのできた小さな家の中で、彼女がその心地よい歌声で私を楽しませるように、その口が物言わずとも。

194. Mnasalque. — Le bourg d'Argile sur sa grande route, possède les restes de la sauterelle de Démocrite, sauterelle aux ailes harmonieuses, et dont le chant délicieux remplissant toute sa demeure, lorsqu'elle se mettait à chanter son hymne du soir.

194. ムナサルカス — アルジルの町は、その大いなる街道の上に、デモクリトスのキリギリスの遺骸を湛えている。その翅は旋律豊かで、その歌はこの上なく甘美にその住まいを満たしたものである。彼女が夜の頌歌を歌い始めたときには。

195. Méléagre. — Sauterelle, charme de mes amours, consolation de mes insomnies, muse des guérets aux ailes harmonieuses, naturel écho de la lyre, chante-moi quelque air aimé, en frappant avec tes pieds tes ailes sonores, afin de me délivrer de mes soins et de mes peines, ô sauterelle, par ces délicieuses modulations qui dissipent les tourments de l'amour. Je te promets un présent matinal, une ciboule fleurie et des gouttelettes de la rosée des champs.

メレアグロス — キリギリスよ、わが愛を歌え、我が不眠の慰めよ、旋律豊かな休閑地のミュージックよ。豎琴の自然のこだまよ、なにか愛らしい歌を歌っておくれ。お前の足で響き高いお前の羽をたたきながら。私を労苦から解放するために。おお、キリギリスよ、愛の責め苦し紛らわせるその甘美なるその抑揚によって。私はお前に朝の贈り物、花咲くネギと野の朝露のしずくをお前に与えることを誓おう。

196. Le même. — Enivrée, de gouttes de rosées, tu modules, ô cigale, un air rustique qui charme la solitude, et sur les feuilles où tu poses tu imites, avec des pattes dentelées sur ta peau luisante les accords de la lyre. Oh ! chante ; je t'en prie, aux Nymphes de la forêts quelque nouvel air qui rivalise avec ceux de Pan, afin qu'ayant échappé à l'Amour, je goûte un doux sommeil, ici couché à l'ombre de ce beau platane.

196. 同 — 朝露に酔ったお前は奏でる、おお蝉よ、孤独を魅了する田園風の一曲を。そしてお前の憩う葉の上で、お前は、レースのような手足でもって、お前の輝く肌の上に、豎琴の和音を真似る。おお、歌いたまえ。お願いだから。森のニンフたちに、パンのそれ

にも匹敵する何か新しい歌を。愛から逃れた私が、甘美なる眠りを味わうことができるように。ここにこうして美しいプラタナスの木陰に横になって。

197. PHAENNUS — Sauterelle, je chantais encore à Démocrite un air mélodieux avec mes ailes, lorsque je me suis endormie du sommeil de la mort ; et Démocrite m'a élevé cette tombe si bien proportionnée, que tu vois, étranger, près d'Orope.

197. パエンノス — キリギリスとして、私は、まだデモクリトスに私の翅の旋律に満ちた歌を歌っていた。死の眠りにつきたその時には。そしてデモクリトスが実に私の身の丈にあったこの墓を作りたもうたのだ。見知らぬ人よ、このオロペーの近くでそなたが見そなわすような。

198. LÉONIDAS — Passant quoique la pierre sépulcrale qui me retrouve soit petite et à peine au-dessus du sol, n'en loue pas moins Philénis ; car la sauterelle, qui naguère chantait sur les buissons et dans les chaumes, elle l'a aimée deux ans, elle l'a nourrie, s'endormant avec plaisir à ses chansons. Même après sa mort, elle ne m'a pas négligée : ce petit monument, c'est elle qui me l'a élevé en souvenir de mes vocalises.

198. レオニダス — 通る人よ、私の眠る墓石が小さかろうとも、そして土から少ししか見えていなかろうとも、だからといってピラニスに賞賛を惜しまないでおくれ。というのも、かつて小川や麦藁の上で鳴いていたキリギリスを、かの人は2年にわたって愛し、養ったのだ。喜んでその歌にまどろみながら。死して後にさえ、彼女は私を忘れなかった。この小さな記念碑を、私の歌の思い出としてたてたもうたのは彼女なのだから。

次の199番の詩は、シジュウカラの死を歌ったものであるが、この余白には書き込みがない。しかし、これに続く二つの詩には書き込みがある。

200. NICAS — Je ne me glisserai plus sous la feuillée d'une branche touffue, je n'y prendrai plus mes ébats en agitant mes mélodieuses ailes ; car je suis tombée dans les mains maudites d'un enfant, qui m'a saisie à l'improviste sur le vert rameau où j'étais posée.

200. ニカス — 葉むらの枝の葉の下に私はもう潜り込むことはない。私はそこで音色豊かな翅を動かしながらふざけ騒ぐことはもはやない。というのも、私は子どもの呪われた手の内に落ちたので。私が置かれていた緑の枝を、子どもはそれとは知らずにつかんだからである。

201. PAMPHILE — Tu n'épancheras plus, du rameau vert où tu te posais, harmonieuse cigale, les sons de ta douce musique ; car, pendant que tu chantais, un enfant, et ne le feras plus, car un voleur t'a surpris dans ton sommeil et t'a tordu le cou.

200. パンピロス — お前はもはや、お前の憩う緑の葉むらから、旋律豊かな蝉よ、お前の甘美なる音楽を降り注がせることはないだろう。というのもお前が歌っている間に、子どもが、お前はもはやそうできないだろうが、盗人がお前の眠りを遅い、首をひねってしまったから。

以下、202 番から 208 番までの詩の余白には書き込みがない。ちなみに、これら書き込みがない詩が主題として扱っているのは、201 番がはっきりしないものの、鳥であると思われる以外は 202 番から 205 番がヤマウズラ、206 番が猫、207 番がウサギ、208 番が馬である。そして、209 番に至って、再び 209 番の詩の余白に書き込みが見られる。

209. Antipater. — Ici, près d'une aire à battre le grain, patiente et laborieuse fourmi, je t'ai construit un tombeau d'une motte de terre sèche, afin que le sillon et ses épis, don de Cérès, te charment encore dans ta sépulture rustique.

209. アンティパテトロス — ここに、脱穀場の傍らに、辛抱強く働き者の蟻よ、私はお前のために掘いた土を盛って墓を作ってやったのだ。畦とケレスの恵みたる麦の穂が、田舎家風のお墓に眠るお前を今も魅了するように。

以下、ツバメを詠った 210 番、犬を詠った 211 番、馬を詠った 212 番には余白の書き込みがないが、これに続く 213 番には余白に書き込みがある。

213. ARCHIAS. — Naguère posée sur un vert rameau de picéa ou sur la cime ombreuse d'un pin, harmonieuse cigale, tu chantais ton air aux bergers sur tes flancs, avec tes pattes, plus agréablement que sur une lyre ; mais des fourmis, t'ont rencontrée sur leur route, t'ont vaincue, et maintenant, les ténèbres inopinées du Styx t'enveloppent. Si tu as succombé, il ne faut pas trop s'en indigner : le prince des poètes, Homère n'a-t-il pas été tué par des énigmes de pêcheurs ?

213. アルキアス — かつてピセアの枝や松の木の蔭濃い頂に座していた、旋律豊かな蝉よ、豎琴よりも心地よく脇腹を脚で奏でて、羊飼いどもに、歌を歌っていた。しかし蟻どもがお前と道で出会い、お前を打ち負かした。そして今や。スティクスの抗いがたい闇がお前を包んでいる。お前が負けたからと言って、そう嘆く必要もない。というのも、詩人の王子たるホメロスもまた、漁師の謎によって殺されたのではなかっただろうか。

こうして見てくると、154 頁から 157 頁に至る一連の余白の書き込みは、もっぱらキリギリスあるいは蟬に捧げられた詩を意図的に選んでなされているようであり、無造作に鉛筆で書き殴ってあるように見えて、他の動物の詩を詠ったものは入念に避けられているように思われる。同じくキリギリスと蟬に捧げられた碑銘詩が 180 頁の 364 番に見られるが、その余白にもやはりハーンの鉛筆による書き込みがある。

364. MARCUS ARGENTARIUS. — Myro a élevé ce monument à une sauterelle et à une cigale, que de ses mains elle a recouvertes d'un peu de poussière, après avoir versé des larmes de regret sur leur bûcher ; c'est Pluton qui lui a ravi sa cigale, et Proserpine, sa sauterelle.

364. マルクス・アルゲンタリウス — ミュロはこの記念碑をキリギリスと蟬のために作り、手ずから塵を盛った。その亡骸の上に後悔の涙を注いだのちに。彼女の蟬を奪ったのはプルトンであり、キリギリスを奪ったのはプロセルピナである。

沓掛良彦は『ギリシア詞華集 2』の第 2 分冊解説の中で、これら「小動物の死をテーマの詩を作ることが詩人たちの間で広く流行していたことを想わせる」とし、「この種の作品の多くは詩人の手慰みとして作られたものと思われ、詩人の機智やあそび心を感じさせるたわいもない詩が多く、ここでも模倣・模擬の詩学が作用して、回想で類似した作が並ぶ結果となっている」としている。そして、「190 番台に並んだ、キリギリスを詠った一連の詩に、模倣が模倣を呼んだ好例が見られる」としながらも、「キリギリスと蟬の死を詠ったアニュテの詩（190 番）や、それを模したマルクス・アルゲンタリウスの詩（364 番）のように、可憐な美しさを宿した佳篇もあることは言うておかなければなるまい」<sup>8)</sup>と述べている。

ところで、ハーンの東京帝国大学における講義録に親しんだものならば、ハーンが、「虫についての古いギリシアの詩」について講義していることを知っているはずであり、その講義の中でハーンは、まさしくこの、190 番のアニュテの詩と 364 番のマルクス・アルゲンタリウスの詩を英語で引用して解説しているのである<sup>9)</sup>。この詩中の「ミュロ」は、沓掛によれば、アニュテの同時代の女流詩人モイロ（前 300 年頃の詩人）を指すと解されるが、そのような情報を持たなかったハーンは、この名を古いギリシアの少女の名と解している。また、沓掛によればこれら一連の小動物の死を詠んだ詩は、本来の意味での墓碑銘ではなく、すでにそのような趣向の詩が広く流行していて、さらにその模倣も数多く行われていたことを示しているということになる。しかし、ハーンにそのような情報はなかったものと思われ、むしろ素直に、古代ギリシアではペットの死を歌に詠んで悼む習慣があったものと講義では解説している。

It would also appear that Greek children kept insects as pets, and made little graves for them when

they died, just as one sees Japanese children doing today.

ギリシアの子どもたちは虫をペットとして飼っていたようで、その虫が死ぬと、小さな墓を作っていたようである。ちょうど今日日本の子どもたちがそうするのと同じように<sup>10)</sup>。

ハーンはこの講義の中で、そのような古代ギリシアの感性と伝統的な日本の感性の類似性を強調しているのであるが、ここではハーンがそう結論するに至った発見が、仏訳版『ギリシア詞華集』のキリギリスおよび蟬に関する碑銘詩の余白のおびただしい書き込みに見られることを指摘するにとどめたい。ところでこのギリシアの虫に関する詩の講義の中では、ハーンは満遍なくさまざま虫を詠んだギリシアの詩を引用しているが、この講義の翌年に行われたと思われる「虫についてのいくつかのフランスの詩」の講義の中では、ハーンはもっぱら蟬とキリギリスを主題とした詩を引用して紹介している。中でもアニユテの詩を典拠とした（しかもハーン所蔵の版と同じ仏訳版を典拠としたとされる）エレディアの「墓碑銘（Épigramme funéraire）」を紹介するにあたって、ハーンは「虫に関するもっとも美しいフランス近代詩であり、その美しさは古典的な完璧さによる（The most beautiful modern French poem about insects, beautiful because of its classical perfection）」と評している<sup>11)</sup>。というにもこの詩は、ハーンによれば、「ギリシア的感情と表現の厳正な模倣であり、『詞華集』の詩人たちの作を入念に研究したものである（an exact imitation of Greek sentiment and expression, carefully studied after the poets of the “Anthology”）」<sup>12)</sup>だからということになる。そして、古代ギリシアでこのような碑銘詩が詠われた背景を、ハーンは想像を逞くさせながら講義中でこのように解説している。

Little Greek girls thousands of years ago used to keep singing insects as pets, every day feeding them with slice of leek and with fresh water, patting in their little cages springs of the plants which they liked. The sorrow of the child for the inevitable death of her insect pets at the approach of winter, seems to have inspired many Greek poets. With all tenderness, the child would make a small grave for the insect, bury it solemnly, and put a little white stone above the place to imitate a grave-stone. But of course she would want an inscription for this tombstone — perhaps would ask some of her grown-up friends to compose one for her. Sometimes the grown-up friend might be a poet, in which case he would compose an epitaph for all time.

幼いギリシアの少女が数千年も前に、歌う虫をペットとして飼う習慣があり、毎日キュウリのかけらをやったり新鮮な水をやったりして、虫の好む草を入れた籠に入れていた。しかし冬が近づくと虫は必ず死ぬ運命にあり、そのことが多くのギリシアの詩人に靈感を与えたようである。全き憐憫の情をもって、子どもは死んだ虫のために小さな墓を作り、虫を厳かに葬り、そして本物の墓石をまねて、小さな白い石を置いたのであろう。しかし

ちろんのことながらこの墓石に碑文がほしいと願った彼女は、それを大人の友人に頼んだのかも知れない。そしてそんな大人の友人が詩人であることもあったかもしれず、そんな時には詩人がこのような墓碑銘を読んだのかもしれないのである<sup>13)</sup>。

ハーンのこの解説の中には、すでにこの作家特有の自由な解釈が随所に盛り込まれており、やがて「草ひばり (Kusa-hibari)」<sup>14)</sup>として結実するエッセイの記述を伺わせるものでもある。「草ひばり」はもっぱら東京での日常をつづったものであるが、その背景には、このような『ギリシア詞華集』から得た靈感もまたあったということがその余白の書き込みからも窺えるのではないだろうか。

## 2. 因果応報・輪廻転生と妻の死を悼む詩

285 頁と 264 番の詩は、描写詩に分類されているが、内容的にはむしろ碑銘詩といってよいもので、やはり蟬の死を詠ったものであるが、後半の展開が異なっている。

264. APOLLONIDAS IY PHILIPPE. — Dans un buisson, perchée sur l'extrémité d'une branche, une cigale, en plein midi, battant ses flancs de ses ailes, charmait la solitude de ses instinctives mélodies. Or, Criton de Pialie, l'oiseleur, prit avec ses pipeaux ce chantre aux corps aérien. Mais il en fut bien puni : désormais à ses pièges accoutumés il ne se prit aucun de ces volatiles qu'il convoitait.

264. アポロニダス・イ・ピリポス — 小川の中に、枝の先端に止まって、蟬が真昼間に、その横腹を翅で打って、その本能的な旋律で孤独な者の心を慰めていた。ところが、鳥さしのピアリーのクリトンが、その棒でこの天の身なる聖歌隊を捕らえた。しかし彼はこのことで確かに罰を受けたのだ。今ではその手慣れた罫には、あれほど欲していた鳥はどれも捕まらないのだ。

すなわち、その歌声で神をも憩わせていた蟬を捕らえた鳥さしが無益の殺生により罰せられるという、いわば因果応報を物語っている詩であるといえる。アニミズムに根差した古代ギリシアの世界観は、時として仏教思想を思わせる側面を見せるが、晩年仏教に深く傾倒したといわれるハーンが、やはりこの箇所に書き込みを入れているということが興味深い。

また、144 頁 120 番の詩の余白にもやはり書き込みがある。

120. Xénophane. (Fragment.) — On dit que passant un jour près, d'un chien qu'on battait, il en eut pitié, et s'écria. « Arrête, cesse de frapper, c'est mon ami, c'est son âme ; je le reconnais à sa voix.

120. クセノファネス（断章）ある日人が、打擲されている犬のそばを通りかかって憐れに思い、こう叫んだ。「やめろ。叩くのはやめろ、それはわが友、その魂なのだ。その声でそれと分かったのだ」。

この詩も一読して、仏教思想における輪廻転生を体現しているような詩であり、古代ギリシアにもやはり同様の死生観があったことを物語っている。この詩についてもまた、ハーンが浅からぬ関心を示して印をつけていることをここでは確認しておくべきだろう。

258 頁 95 番の詩は、これも描写詩に分類されている詩であるが、むしろ碑銘詩に分類されてもよさそうな詩であり、昆虫ではなく白い雌鶏の詩を詠ったものである。この詩の余白にも、やはりハーンによる書き込みがある。

95. ALPHÉE DE MITYLÈNE. — Par un jour d'hiver, une poule toute blanche de neige étendait sur ses petits le berceau de ses ailes ; et comme elle restait là luttant contre l'intempérie du ciel, le froid du ciel la tua. Procné et Médée, rougissez de honte chez Pluton, en apprenant d'une poule le devoir des mères.

ミティレーヌのアルペイオス — 冬のある日、雪のように真っ白な雌鶏が揺り籠のように羽を広げて雛を守っていた。そして悪天候とそのようなままで戦った結果、天の凍えが雌鶏を殺してしまった。プロクネーとメディアよ、プルトンのもとで恥に顔を赤らめよ。この雌鶏から母なるものの務めを学んで。

この詩の後段は、いかにもハーンの好みそうな因縁話の様相を帯び、また、ハーンがその作品の中でしばしば讃えている母なる存在の崇高さを雌鶏にことよせて語っているものである。以下同じように、早世した母であり妻である女性を詠う詩にやはりいくつかハーンの手書きがあるものがあるので、それを確認しておきたい。

まずは 184 頁 386 番の詩である。

386. BASSUS LOLLIUS. — C'est moi, moi Niobé, autant de fois changée en pierre que, mère infortunée, j'ai épuisé le lait de mes mamelles. Ce grand nombre d'enfants [dont j'étais si fière] enrichit le royaume de Pluton : c'est pour lui que je les ai mis au monde. O déplorables restes d'un immense bûcher !

386. バスス・ロリウス — それは私、ニオベよ。あれほど何度も石に変えられた。不運な母親、私はわが乳房の乳を使い果たしました。あれほど多くの子どもたちが（その子たちを私は誇りに思っているのですが）プルトンの帝国をにぎわわせています。私が子ど

もたちを生んだのは、プルトンの為なのです。おお、巨大なる火葬台の嘆かわしい残滓よ。

これは、自分が死んだだけでなく、自らが産み落とした数多くの子どもも今は冥界にいる母親に事寄せた墓碑銘である。死児のことを語るものまたハーンらしい展開であるともいえよう。これに続く同じような趣向の詩にも、余白へのハーンの書き込みがある。

387. BIANOR. — Je pleurais la mort de mon épouse Théonoé, mais l'espérance d'élever notre enfant me rendait mon malheur plus supportable ; et voici que l'arrêt de la Parque jalouse vient de m'en séparer. Hélas ! cher enfant, seul bien qui me restait, toi aussi tu as trompé mon attente. O Proserpine, écoute de vœu d'un père au désespoir, place l'enfant sur le sein de sa défunte mère.

387. ビアノール — 私は我妻テオノエの死を嘆いていた。しかし、我が子を育てられるという希望が、私の不幸をどうにか耐えうるものとしている。そして、嫉妬深いパルカ女神の手で、ついに私はわが子と引き離されてしまった。ああ、いとし子よ、私に残っていた唯一の財産であるお前もまた、私の期待を裏切ってしまった。おお、プロセルピナよ、絶望した父の嘆きを聞き、すでに死せる母の胸にその子をおきたまえ。

この父の嘆きは、反転させれば、ハーンの『怪談』の「雪女」の末尾で、秘密を明かした夫巳之吉との間になした10人の子どもを育てるという条件で、巳之吉の命を奪わず立ち去った雪女の最後の愛情を喚起させるものでもある<sup>15)</sup>。「雪女」成立の背景には、このようなギリシアの碑銘詩からの着想もあったと言えるのではないだろうか。

さらに、病を得た妻が死後に夫の再婚を呪う詩にもまた、ハーンによる余白の書き込みが存在する。314頁422番の詩である。

422. APOLLONIDAS. — « Par nos enfants, dit-elle, je t'en conjure, si je meure avant toi, ne forme pas de nouveaux nœuds. » Elle mourut, et lui se hâta de prendre une autre épouse. Mais Philinna, même morte, punit Diogène d'avoir oublié sa prière ; car dans la première nuit des noces, sa colère vengeresse fit crouler la chambre nuptiale, de sorte qu'un second soleil ne brula pas sur le lit des époux.

422. アポロニダス — 「私たちの子どもたちにかけて、私はあなたにお願いします。もしも私があなたより先に死んだら、新しい縁はつながないでください。」彼女は死に、そして彼はすぐさま後添いを求めた。しかし死んだフィリンナは、ディオゲネスが自分の懇願を忘れたかどで彼を罰した。というのも、初夜の晩に、彼女の復讐の怒りが新婚の寝屋を崩れさせ、かくして新郎新婦の床を翌日の太陽が照らすことはなかったからである。

この詩の中にも、ハーンの『日本雑録』に収められた「破られた約束」や『怪談』に収められた「お貞のはなし」の祖型とでもいったものを認めることができる。日本で紡がれたハーンの話には、実はこのようにさまざまな読書の記録もまた織り交ぜられているのであり、古い日本人の心のありようとも通底するような、というよりは人類に普遍的な情愛や怨念といったものを、ハーンは『ギリシア詞華集』の中にも見出していたのではないだろうか。

## おわりに

本稿では、ヘルン文庫所蔵『ギリシア詞華集』第1巻に見られる余白の書き込みから、ハーンの講義や創作に影響を及ぼしたのではないかと思われるものについて精査を行ってきた。また、第2巻には、裏表紙に272とただ一つの数字が鉛筆で書かれており、その頁にはただひとつの鉛筆書きの印がある。印がついているのは、「補遺」に分類されている以下の詩である。

384. « Femme, fais-nous connaître ton père, ton époux ; dis-nous ton nom, ton âge, ta patrie. — Nicandre était mon père, Paros ma patrie ; on m'appelait Socratee ; Parménion, mon époux, m'a déposé morte dans ce tombeau. Je lui dois cette faveur funèbre qui perpétuera mon souvenir glorieux, même dans les âges futurs. Le fléau imprévu d'une perte de sang m'a ôté la vie ainsi qu'à mon jeune enfant. Le pauvre petit n'est pas même venu au jour ; c'est dans le sein de sa mère qu'il repose chez les morts. Je n'ai pas dépassé ma trente-quatrième année. Une lignée mâle me survit : j'ai laissé deux garçons à leur père, à mon époux bien-aimé ; j'habite avec le troisième cette demeure fatale. — O déesse toute-puissante, toi qu'on honore sous tant de noms, fille de Cérès, prends Socratee par la main et conduis-là au séjour des bienheureux. — Et que la déesse protège et favorise les passants qui ont dit : « Réjouis-toi, Socratee, chez Pluton. »

384. 「女よ、汝の父、汝の夫をわれらに知らせよ。汝の名、汝の年齢、汝の祖国を教えよ。」「ニカンドルがわが父の名、パロスがわが祖国、人は私をソクラテと呼びました。パルメニオンがわが夫、この墓にわが亡骸を置いてくれたのは夫。夫あればこそ、こうしてわが死後も栄光の記憶の恩恵に末代まであずかることができるのです。予期せぬ失血で私とわが幼子の命は奪われました。哀れな幼子は日の目を見ることもなかったのです。いまや冥界にあって、この子は母の胸に抱かれております。私は齢34を超えることはできませんでした。男系が私の後に残されました。二人の息子を、我が愛する夫の元に残して参りました。私はこの黄泉の国に、三番目の息子と暮らしております。おお、全知全能なる女神よ、汝、かほど多くの名で讃えられるケレスの娘よ、ソクラテの手を導いて、幸福なる者どもの住処へと導きたまえ。「ソクラテよ、プルトンの御許で楽しみなさい」と言った道行く人々を庇護し、厚く遇せよ。

この詩もまた、第1巻の書き込みに見られたような、病を得て夫の元に子供を遺して死んだ若い妻が、自らの出自と死の由来を語る墓碑銘である。この詩の内容にもまた、若い時代からハーンが理想とした「幽霊恋人 (phantom love)」<sup>15)</sup>、ひいては「雪女」の祖型が透けて見えているのではないだろうか。

また、この詩の冒頭の形式には、ハーンが若き新聞記者であったニューオリンズ時代にその翻訳を発表した、ボードレルの散文詩「異邦人 (L'Étranger)」における問答を思わせるものがある<sup>16)</sup>。確かにハーンによる書き込みはないものの、同書の260頁には、ボードレルのこの散文詩に似た趣の墓碑銘が収められている。

307 « Étranger, tu demandes qui j'étais, de qui je suis né ; tu l'apprendras si tu t'arrêtes quelques moments devant ma tombe. Je dois la vie à Glaucus mon père, à ma mère Chrysogone, et pour mon malheur j'ai été privé d'eux avant le temps. Car loin de la Bithynie ma patrie j'ai trouvé la mort ayant tenté un voyage périlleux et m'étant fié à mon navire ; et je gis sur le rivage de Shérie battu par les vents, en présence de cette mer qui m'a été si funeste.

307. 「見知らぬ人よ、お前は私が誰であったかを、私が誰から生まれたかを問うている。私の墓の前にはしばし立ち止まれば、お前はそれを知るだろう。私はその生を父であるグラウクスと、母であるクリソゴヌにより、不幸なことに若くしてその元を去ることになった。というのもわが祖国ビティニアを遙か離れて、危険な旅に出て、船に運命を委ねたがために死ぬことになった。そして私は風になぶられながらシェリーの岸辺に眠る。わが運命を決した海のまにまに。

ところで、ハーンの旧蔵書のすべてにこのような書き込みが見られるわけではなく、むしろこれほど多数の書き込みがある例は稀であると言ってよい。おそらくハーンは、エレディアの詩を通してこの仏訳版『ギリシア詞華集』に出会ったものと思われるが、『ギリシア詞華集』それ自体は、ハーンが以前から親しんでいたものであると思われる。なぜならば、やはりニューオリンズ時代にハーンが書いた「日本の詩瞥見 (A peep at Japanese poetry)」で、「東洋学者たちがこれらの日本の詩を『ギリシア詞華集』にたとえているのはゆえなきことではない (has not inaptly been compared by Orientalists to the *Greek Anthology*)」と筆者は述べていて、日本の短い詩を「短い韻文の究極の完成形 (the supreme perfection of epigrammatic verse)」とまで評しているからである<sup>17)</sup>。ここで筆者は、『詞華集』の中のプラトンによる一節の英訳として以下の詩を引用している。

Gazing on stars, my Star ? I would that I were the welkin

Starry with infinite eyes, gazing forever on thee !

星を見つめているのだね、わが星よ。私も天空でありたい。

数限りない目で耀いて、お前を永遠に見つめるために。

また、同じエッセイの中で、和泉式部の「あらざらむこの世のほかの思ひ出にいまひとたびの逢ふこともがな」の和歌は、やはり『ギリシア詞華集』の中で、「亡き人が恋人を忘れぬように忘却の川の水を飲み干さないように願う (the beloved dead is besought not to quaff the waters of Lethe, lest she forget her love)」墓碑銘に比せられている<sup>18)</sup>。

こうしてみると、若い時代からハーンにとって『ギリシア詞華集』は着想の泉であったことが分かる。そうであるならば、比較的後年になって入手し耽読したはずの仏語版の他に、旧蔵書にある英訳版の、しかもパブリック・スクールでの教科書版の『詞華集』についても精査を行う必要があるだろう。なぜハーンは英訳の『詞華集』を教科書版で所有していたのか。そこには自らの英国での学校時代の記憶が刻印されているのかもしれないし、またこの英訳版も、ハーンの創作の靈感と泉となったかもしれないのである。我々の仮説を裏付けるかのようには、この英訳版の裏表紙にも仏訳版を上回るおびただしい書き込みがあり、本文の余白には、解説を待っているかのようなハーンによる鉛筆書きのマークが随所に記されているのである。

## 註

- 1) 『富山大学附属図書館所蔵ヘルン（小泉八雲）文庫目録』改訂版、富山大学附属図書館、1999年による。
- 2) ただし、同書を精査してみると、数字365については、頁数ではなくその詩に付された通し番号であるように思われる。
- 3) ハーンの鉛筆書きの数字は、どうしても319に見えるが、実際に手書きの印があるのは、317頁から318頁である。
- 4) ここでいう書き込みとは、必ずしも文字が書かれているものではなく、左頁の場合左余白、右頁の場合右余白に、鉛筆によるマークのあるものも含めている。以下このようなマークも含めて本稿では書き込みと表現する。
- 5) 描写的エピグラムに分類されている詩でも、内容的には碑銘詩とみなした方がよいと思われるものが相当数ある。
- 6) ここでは「キリギリス」と訳したが、フランス語の *sauterelle* は本来「バッタ」である。しかし、「翅を震わせて鳴く」等の記述を見ると、これはやはり「キリギリス」であろうという結論に達する。なお、『ギリシア詞華集』を読んでいると、キリギリスと蝉はしばしば対になる昆虫として詠われ、場合によっては混同されているように思われることもある。
- 7) 拙訳をほどこすにあたっては、杵掛良彦訳『ギリシア詞華集2』京都大学出版会、2016年を参考にさせていただいたが、ヘルン文庫の仏訳版『ギリシア詞華集』は散文訳であり、杵掛が参照した版本とは異なるので、内容的に異なっている箇所もある。その点についてはヘルン文庫の仏訳版の内容に沿って

訳出するように努めている。

- 8) 前掲書 578・579 頁。
- 9) Lafcadio Hearn, *Complete Lectures on Poetry*, The Hokuseido Press, 1934. 440 頁。以下『講義録』とする。
- 10) 『講義録』 440 頁。
- 11) 『講義録』 424 頁。
- 12) 『講義録』 425 頁。
- 13) 『講義録』 426 頁。
- 14) 「雪女」では最後にユキが巳之吉に、「あそこに眠っている子どもたちがいなければ、この瞬間にでもお前を殺したものを。けれど今となっては、子どもたちの世話をよくよく見ておくれ。もしも子どもたちがお前の扱いを嘆くようなことがあれば、その時はそんなお前に見合った仕打ちをしてやろう (But for those children asleep there, I would kill you this moment ! And now you had better take very, very good care of them; for if ever they have reason to complain of you, I will treat you as you deserve !)」 (*The Writings of Lafcadio Hearn*, vol. XI, Houghton Mifflin Company, 1922, p. 231) と述べて立ち去る。
- 15) この「幽霊恋人 (phantom love)」について、ハーンはエッセイの末尾で以下のように述べている。「決して出会うことないその女が彼の前に立っている。幽霊のように、警告するような優しく悲しい目をして。そして彼は彼女に挑んではならないのだ (the Woman that he shall never know stands before him like a ghost with sweet sad eyes of warning — and he dare not !)」 (*The Writings of Lafcadio Hearn*, vol. II, Houghton Mifflin Company, 1922, p. 315)
- 16) このことについては、拙論「ラフカディオ・ハーンとシャルル・ボードレール — ボードレールの4つの散文詩の英訳をめぐる —」『富山大学人文学部紀要』第65号、2016年、203 - 219頁を参照されたい。
- 17) Lafcadio Hearn, *Essays on European and Oriental Literature*, New York, 1923, p. 338.
- 18) 同書 339 頁。

